



表紙



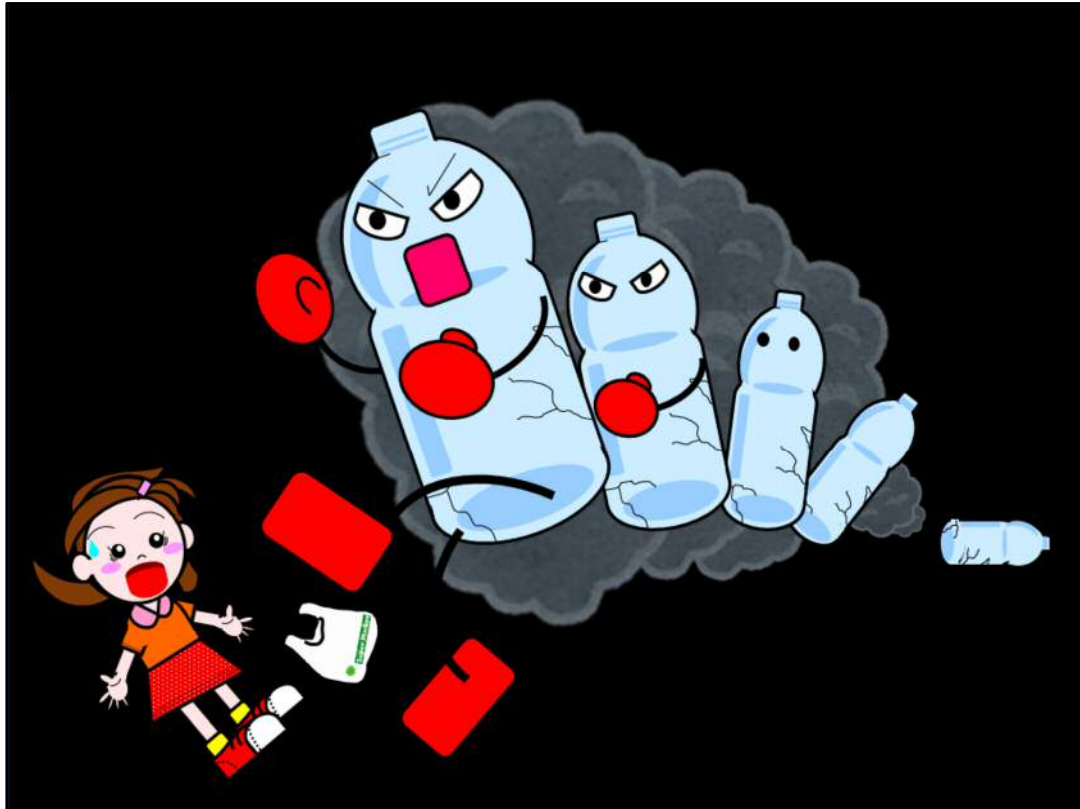
- ①  
「きれいな貝はないかな？」  
海辺にやってきた、りいちゃん。  
キョロキョロ歩いていると、少し先に、何かとうめいなものがキラッと光りました。  
「めずらしい！とうめいな貝！」  
急いで拾ってみると・・・



②

それは、少しつぶれたペットボトルでした。  
「なーんだ。これ、ペットボトルだ」  
りいちゃんは、そう言ってそれをポイっとすてました。

その時です。  
「ちょっとまったあー！！」  
おこったような低い声が、後ろからひびきました。  
「えっ、何！？」  
りいちゃんがふり返ると、だれもいません。



③

「こっちだってば！」

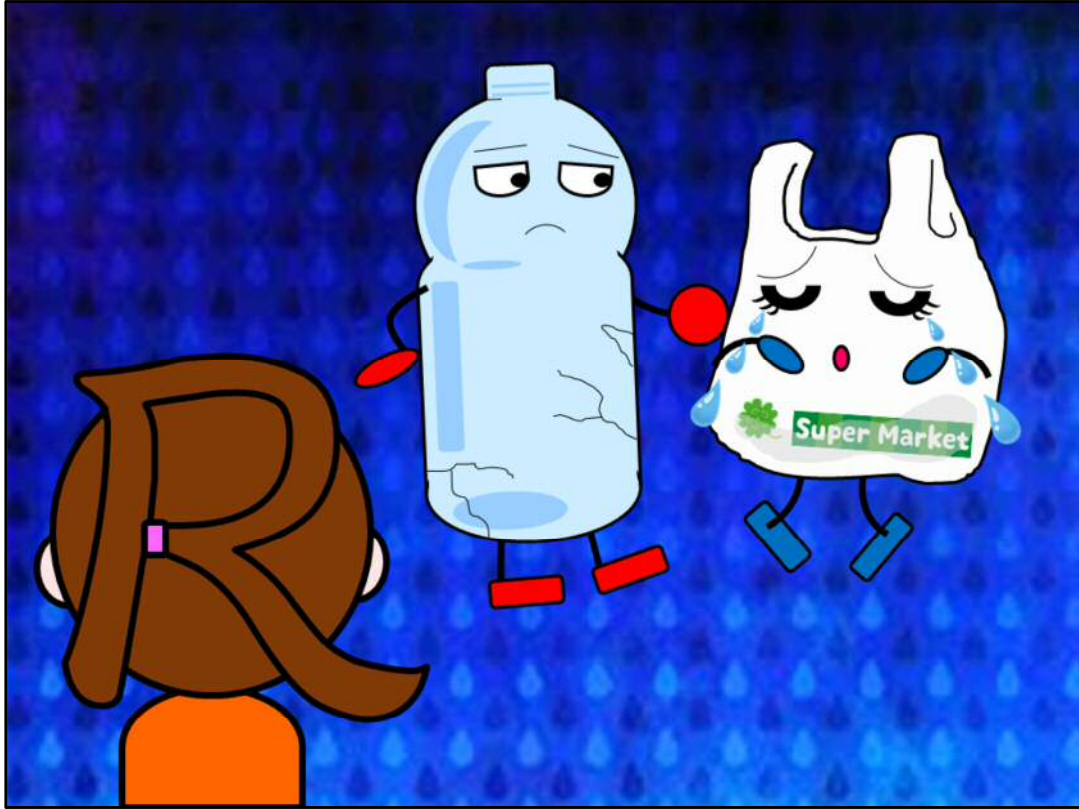
その声は、りいちゃんの足元から聞こえました。それは、さっきすてたペットボトルの声だったのです。

「よくも、すてたなあ！」

ペットボトルはそう言いながら、むくむくと大きくなり……。あっという間にりいちゃんより大きくなって、その体には、ところどころ、ヒビが入っていました。

「よくもオレをすてたなあ〜っ！うおーっ！」

おばけになったペットボトルが、おそろしい顔をして、りいちゃんにせまってきました。



④

「わあーっ！」

りいちゃんはびっくりして、持っていた貝のふくろを放り投げました。

(にげなきゃ！)

あわてて走り去ろうとした、その時

「りいちゃん！わたしのこともすてちゃうの？」

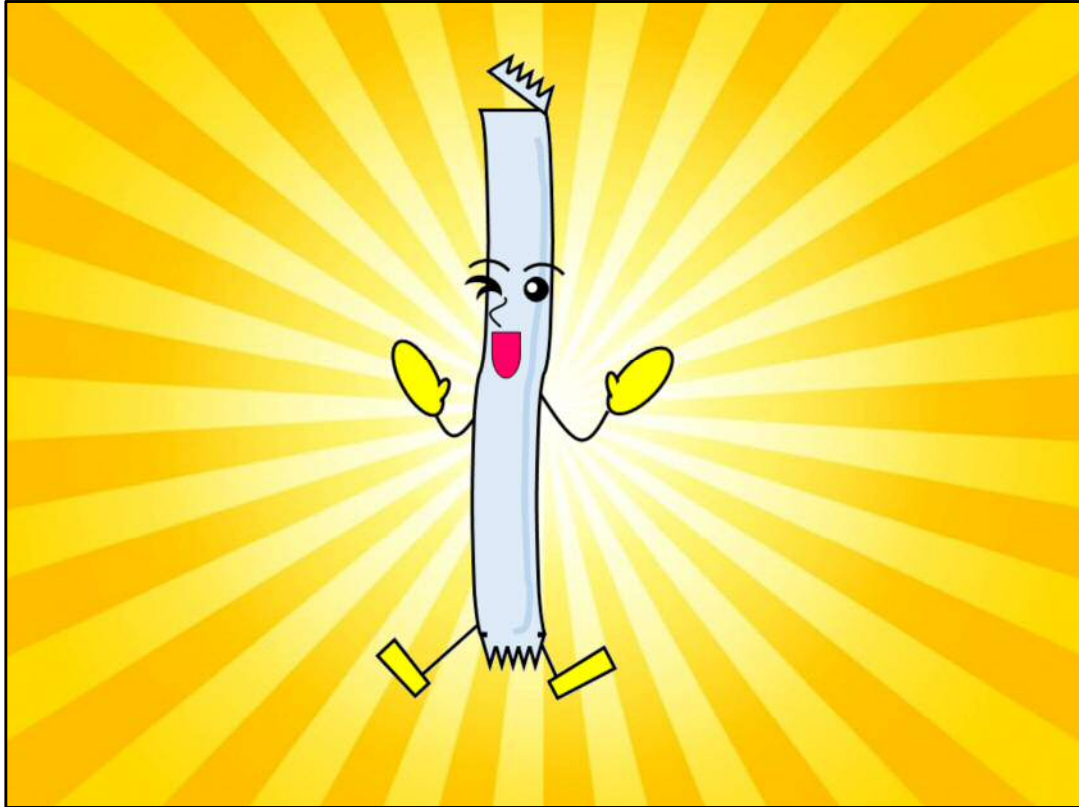
今度は、か細い、悲しそうな声がしたのです。

「え？」

もう一度ふり帰ると、ペットボトルの横で、りいちゃんより大きなビニールぶくろが、大つぶのなみだを流していました。

よく見ると、さっきまでりいちゃんが持っていたビニールぶくろと、同じもようでした。





⑤

「こんどは、ビニールぶくろがおばけになっちゃった！」  
りいちゃんが、にげるのもわすれてポカンとしていると

「まあまあ。泣いてもしょうがないっすよ」  
と、岩のかけから別の声がしました。

ひょいっとあわられたのは、ペラペラのうすくて細長いぶくろのおばけ。なんだか見覚えのある形をしています。

「もしかして・・・ストローのぶくろ？」

りいちゃんが聞くと、

「そうっす。でも中身のストローとは、はぐれちゃったんすよ」  
長ひょろいおばけが答えました。



⑥

「そんなことよりなあ…！」

ペットボトルおぼけが、さらにぐいっと近づいてきました。

「なんでおれをすてたんだあ」

「そうよそうよ！」

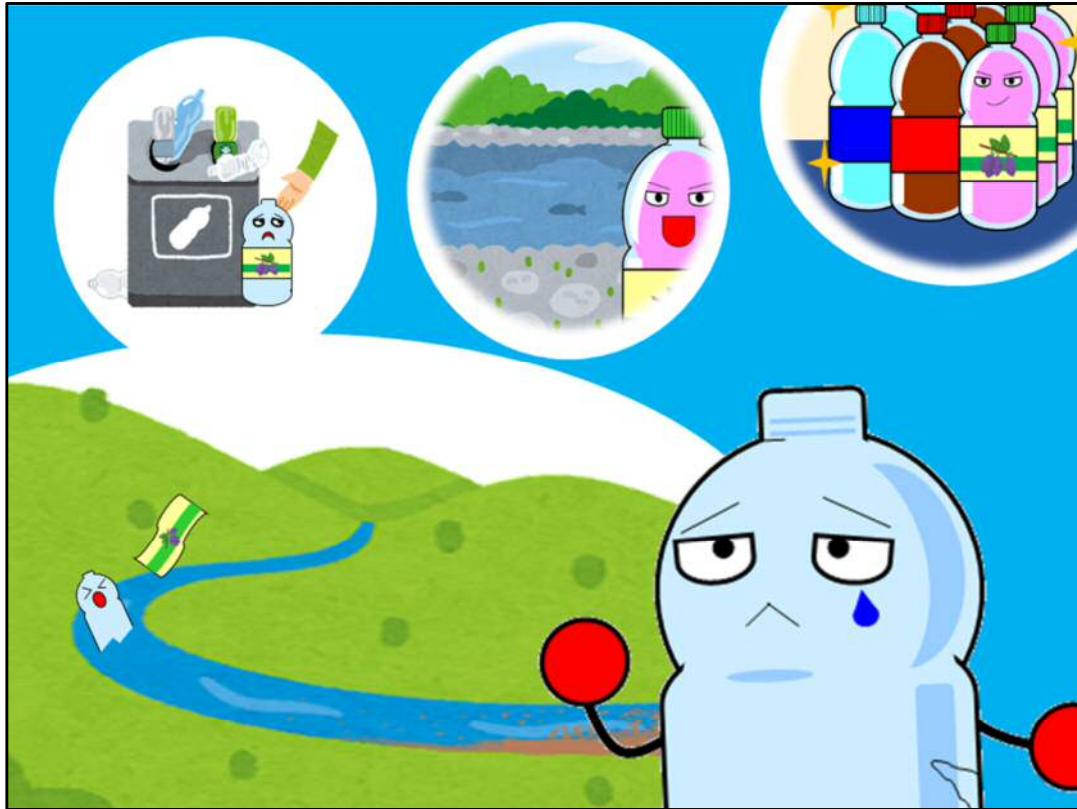
プラスチックごみのおぼけたちにせめられて、りいちゃんは、おおあわてでさけびました。

「さっきはごめん！でも、そもそも、なんでみんなこんなところにいるのよう～！」

すると

「なんでって…なんでって…それは…うおーん！」

さっきまで、ぷんぷんおこっていたペットボトルおぼけが、泣きながら、語り始めました。



⑦

「オレはピカピカのペットボトルとして生まれて、スーパーへ運ばれたんだ。オレを買った人は、キャンプにオレを連れて行ってくれた。山も川もきれいで楽しかったよ。

ところが帰る時、

『にもつになるからじゃまだな』

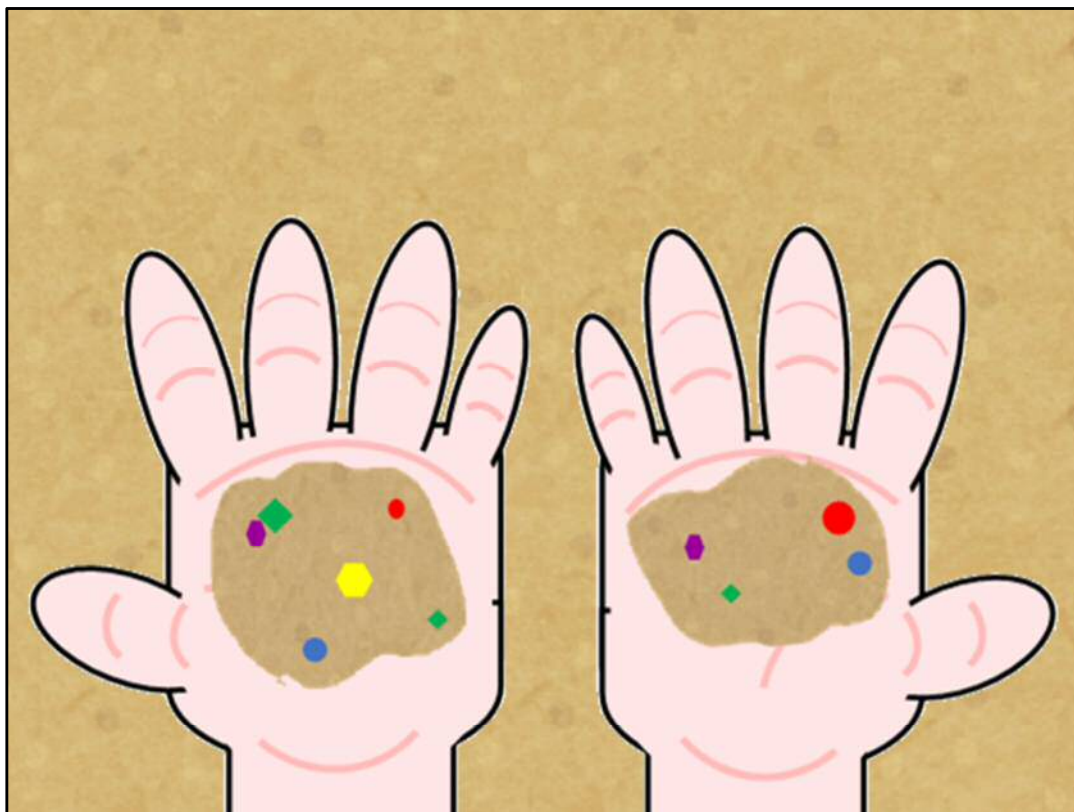
そう言って、その人はオレをすてようとした。

だけど近くのごみ箱がいっぱいでさ。どうするのかわかったら、オレをごみ箱のわきにそっと置いたのさ。

ところがさ、風がピューピューふいてたもんで、オレはコロコロ転がった。あっちへ飛ばされ、こっちへ飛ばされ・・・ついに川にドボン！

オレは岩にぶつかり、滝から落ち、さらに、流され、流されて・・・気が付いたらここにいた」





⑧

「た、大変だったねえー」

りいちゃんは、体中キズだらけのペットボトルに同情(どうじょう)しました。

「ピカピカだった体ももうボロボロだし。もうすぐオレも、くだけて体がバラバラになるかもな」

「えっそうなの?!」

「そうだよ。キミの足元をよく見てみなよ」

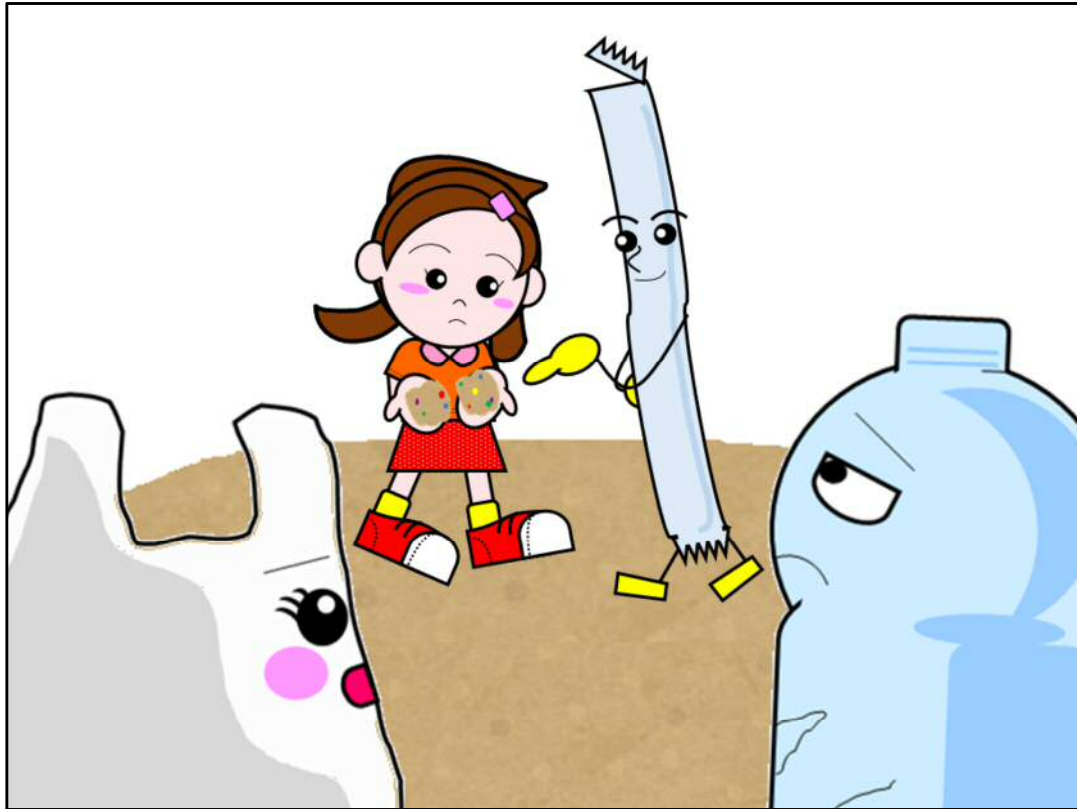
りいちゃんは砂を手ですくってみました。

よーく顔を近づけてみると、砂の中に、砂でも貝でもない、いろいろな色のかけらがまじっていました。りいちゃんの小指のつめより小さいものです。

「これ、なあに」

りいちゃんが聞くと、ストローのふくろおばけが答えました。

「マイクロプラスチックっす。ぼくたちのなかまがたくさん、こんなふうになってるんす」



⑨

「あちこち流されているうちに体がこわれて、どんどんちいさくなって、バラバラになってしまうのよ。海の中には、もっとあるわ」

「せめて、ちゃんとすててくれたら、工場に運ばれて、また生まれ変わることができたのに・・・」

ペットボトルおばけが、ためいきをつきながら言いました。

りいちゃんは、学校の先生に聞いたことを思い出しました。

もやせるごみは、もやせば灰になっちゃうし、もやせないごみは、うめたててしまうけど、「容器包装(ようきほうそう)プラスチック」などは、もういちど「資源(しげん)」にするために分けて集めているのだと。

そうすると、ペットボトルがたまごのパックになったり、プラスチックのふくろが荷台のパレットになったりして、また活やくできるのです。



⑩

「でもさー、オレ、できれば・・・ちがうプラスチックに生まれたかったな。こんな、使いすてのものじゃなくてさ。カッコイイ車の部品とか！」

「わたしは、かわいいマイバッグに生まれたかったわ。そうすれば、いつもお出掛けに連れていってもらえて、よごれたら、きれいにあらってもらえたらいいし・・・。」

「ボクは、ま、本当に必要なんだったら、一回きりの入れ物でもよかったんすけど。『ボクは、大事なものを守ってる～！めっちゃめっちゃ役に立ってる～！』って感じられるじゃないっすか」



⑪

「とにかく、すぐすてられちゃって」

「せめて、また資源(しげん)にしまわうこともされないで！」

「すてられてからも、じゃまものあつかいされるなんて！」

「そんなのいやだ！」

プラごみおばけたちが、いっせいにさげびました。



⑫

りいちゃんは、プラごみおばけたちが本当に気のどくになりました。

そして、少し考えて、決めました。

「わかった！わたし、みんなのこと、連れて帰る！」

「えっ、りいちゃん、本当？」

「うん！そして、うちに帰ったら、どうすればいいか調べてみる！今からでも資源(しげん)ごみに出せるのかな？もしだめでも、こんなところに放っておかない。ちゃんと調べて、みんなを分けて出すから！」

「ホントに？やったあ！」

プラごみおばけたちは大よろこび。





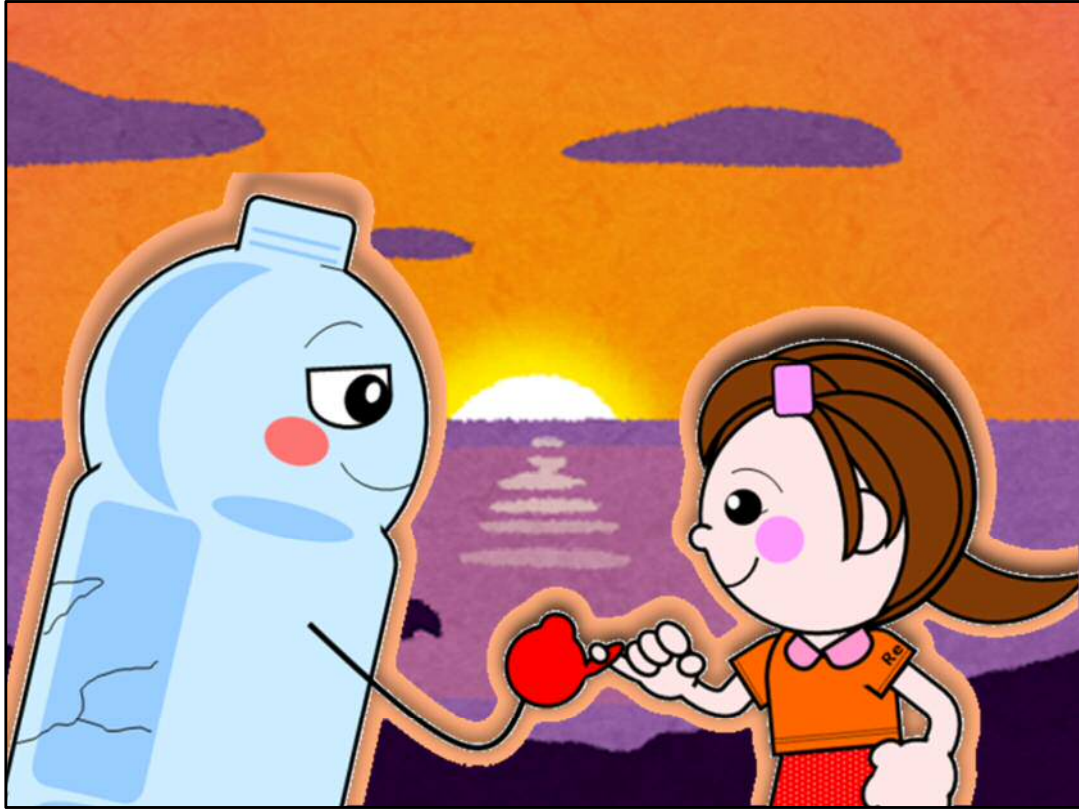
⑬

「あ、りいさん。ねんのためなんすけど。出す時は、くれぐれもし一っかりと、ふくろをし  
ばって出してくださいよ。そうしないと、特にボクみたいな小さいのは、ふくろから落っ  
こっちゃうことがあるんで」

「わかった！」

「よろしくっす！」

「りいちゃん、ありがとう。最後に、もう一つだけお願いしてもいいかな」  
今は、とってもやさしい顔になった、ペットボトルが言いました。



⑭

「うん。なあに？」

「あのさ、いくらりいちゃんが、今日、オレたちを拾ってくれても、他にもオレたちの仲間が、まだあちこちにいる。きのうも今日も、きっとたくさんたくさんすてられて、世界中に散らばっている。

りいちゃん1人じゃ、とても全部を拾うことはできない。

だから…このことをみんなに伝えてほしいんだ。りいちゃんみたいな子が1人ふえて、またその子が他の人に話して、そうやって仲間がふえていったら…もう、オレたちみたいなごみおぼけがいなくなると思うんだ」

「わかった！約束する！」

りいちゃんは、きっぱりと言いました。



⑮

新学期。学校で、りいちゃんは夏休みの自由研究を発表していました。

- ①プラスチックは分かいされずにずっと残る
- ②太陽の光や波で、こわれて小さくなる→マイクロプラスチック
- ③かんきょうに大きなえいきょう(魚にも鳥にも動物にも、人間にも)

「だから、わたしたちは、プラスチックをむだ使いしないで、大切に使い、すてるときはちゃんと気を付けなければなりません」



⑩

学校が始まって、最初の日曜日。

「今日はどんな貝が見つかるかな？」

りいちゃんは、また海辺にいました。手にはかわいいマイバッグ。

「今日も暑いな」

りいちゃんは、バッグから水筒を出して、水をごくごく飲みました。

太陽の光を受けて、青い青い海がキラキラとかがやいていました。



おしまい